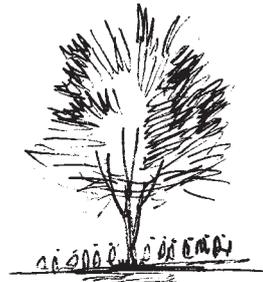


光の子



No.206 2022.8.8

●年間聖句 イエス・キリストは言う：私のもとに来る人を、私は決して追い出さない。
(ヨハネによる福音書6章37節より)



「それぞれの夏」

表紙絵・中島由起子

行々子

落合水尾

(「浮野」主宰)

万緑やまつすぐに見る全病棟

浴衣着て肘の明るき安房の国

智恵子抄炎熱の砂九十九里

炎天下歩くほどにぞ遅れたる

詩碑までは歩くと決めて行々子

花ゑんだういづれも光の子どもたち

花浅沙明日を守る光の子

バカって言うひとがバカなんだよ

ミステリー評論家 稲塚 由美子

この歳になつて、あー、あの時もこの時も「バカって言うひとの方こそバカなんだ」という考えを獲得していたら、どれだけ平穩に暮らせただろうとつくづく思う。

しかも、ひとから誹謗中傷されて傷ついた、悲しかったというだけでなく、自分も、気がつけば「バツカじゃないの!？」とひとを断罪していた。

息子よ娘よ、ゴメンナサイなのだが、娘には、「思春期に支配的で管理しようとしたらもう最悪」と鼻で笑われた。

ひとはすぐに自分のものさしで「これが正しいでしょ」「どうしてこうできないの」と言いたがる。正義は自分にある、だから「どうしてこんな簡単なことが分かんねえかな」と、どこまで上から目線？

もちろん、自分がこうだと信じてることや、これが正しいと思うことがあっていい。それでもそれは、世界中のひと

の中のただ一人の考えや信念であつて、常識でもなく、ましてや押し付けていい話ではない。みんなが言ってる、みんなやつてる、というの、世界から見たらほんの一部。だ

けどひとは、心理的にも身体的にも距離が近くなると、自分の都合のいいようにひとを動かしたくなることもある。

翻つて、「光の子どもの家」

の職員さんたちの日頃の言動の中に、「本当にこれでよかったのか」といつも悩む言葉がある。距離が近ければ近いほど、「こうでしょ」「どうしてこうできないの」とエスカレートしていき、本人のためだという言い訳も頭をよぎる。怒りもする。時にはバトルも繰り広げる（これについては、「光の子」205号10頁小西さんの話が楽しい）。それでも、だ。もしや自分は間違つていなかったか、いつも反省を忘れない。卒園生に対しても、「聴く姿勢」を忘れ

ない。何かあつても断罪しない、ように見える。

居場所とは、容れ物のことではなく、「ひと」がいる場所のことだと思う。「光の子どもの家」とは、子どもたちが、職員さんたちとわちゃわちゃしながら暮らす場所。お互い失敗しても、時にはすこしく離れたりしながら、「並んで」生きようとする場所なのだ。あとしみじみ思う。

巷では、長いコロナ禍で閉塞感が極まり、未だ自由が制限され、さらにロシアによるウクライナ侵攻で脆弱なグローバル経済はガタガタ。政治の自己責任論による家庭帰帰という勝手な理想の押しつけが、子育てを個人レベルに責任転嫁させ、それは家庭、親、子どもへの抑圧構造を激化させる。DVや虐待件数の増大は知るところだろう。結果、のびのびと「遊びと学び」を担保されるはずの子どもの権利が損なわれているのが現状だ。

いつも誰かにとつて管理しやすい、言うことをきく子どもを要求されている。世界中で、日本ほど従順でお利口

さんが喜ばれる国はない。そして子どもたちは外に出る。

こんな話をするのも、昨年の夏、大阪から家出してきた15歳の男の子から連絡があつたからだ。家に泊めたものの、大人のあずかり知らないSNSで繋がった彼は、また歌舞伎町トー横界限に出ている。コロナ感染が再び拡大した頃、子どもを食い物にする半グレたちの姿が見え隠れする中、毎夜歌舞伎町で彼を探して連れ戻した。

それでもトー横は自分の居場所だと彼は言う。本名も住所も知らなくても、ただ干渉しない「友だち」がいるからここに来ると言う。

それは、今いる家庭や学校、大人社会、それに準じた子どもの世界からの、管理や束縛、抑圧で、そこでの息苦しきを感じていたたまれないのだと思う。それを「わがまま」「不良」と断罪すればコトは済むのだろうか。

誰しもが、のびのびと「バカって言うひとがバカなんだよ」と言い合える関係でありますようにと願つてやまな

光の子どもの家の事業計画 番外編 誌上職員採用説明会

毎年、埼玉県内の児童養護施設等が合同で職員採用説明会をしています。ここ3年間はコロナ禍のためオンライン開催です。今回、そこでお話ししていることを誌面に見ました。

★ 光の子どもの家の理念は、
「子どもが安心して暮らせる、子どものための子どもの施設」です。

今年で創立37年目です。現在は職員25名。そのうち創立当初からはたらいっているのが4名。上は70代から、下は18歳まで、幅広い年代の職員がいます。

☆ 他の施設と大きく違うのは、〈断続勤務〉という形ではたらいっている職員が多いところ。多くは、〈交替勤務〉

と言っていて、早番・遅番・夜勤というように、一日の中で職

員が入れ替わりながらはたらいています。

〈断続勤務〉の場合、子どもと一緒に寝起きします。朝食と登校の見送り、朝の職員打ち合わせを済ませたら、休憩。子どもが帰ってくるころに休憩を終え、宿題・お風呂・団らんを過ごして、小さい子は寝かしつけ。そうやって毎日を送っています。

できるだけ《おはよう》《行ってらっしゃい》と、《おかえり》《おやすみ》を言う人格を同じにして、より家庭に近い環境で暮らしを作ろうという思いから、このようにしています。

☆ 全ての職員が〈断続〉ではなく、〈日中勤務〉の職員もいます。おおむね9時〜5時の勤務ですが、それぞれのライフスタイルと施設としての必要をすりあわせ、調整しながらはたらいています。

勤続年数の長い職員が多いため、卒園生が久しぶりに訪ねてきても知った顔がいま

す。正月やクリスマスには泊まりにくる卒園生がいます。仕事に疲れて休みに来る者、子育てに悩んで相談しに来る者、頻繁に食事を摂りに来る20代の卒園生もいます。「こんなところ、二度と来るか！」と出て行った子ほど、よく来ます。

子どもたちにとって、第二の実家としての役割を果たせればと思っています。

☆ 数年前、施設の運営について、外部の方からご意見をいただく機会がありました。その際、「光の子どもの家の組織がよくわからない」と言われました。

たしかに、創立以来《職場で子どもは育たない》と言つて、組織を意識することないままに暮らしを紡いできました。そのうち、長くいる職員はなんとなく分かっている。後から加わった職員や外部から見ると、わかりにくいことが多くなっていたように

思っています。

「子どもが安心して暮らせる、子どものための子どもの施設」を続けるためには、そこではたらく職員も大切にしなければならぬと、あらためて気づかされました。

それ以来、職員のはたらき方や、組織のあり方、研修の持ち方を見直しを進めてきました。

私たち職員は、職員同士が経験の長短、得手不得手、ライフスタイルの違いを互いに補って、《光の子どもの家の子どもを、光の子どもの家全体で育てる》チームです。

時代に合わせて変えていくもの、光の子どもの家の軸として変えてはならないものを見極めながら、今後も取り組みを進めていきます。

子どもが暮らす場としても、職員がはたらく場としても、決して完璧なものではないと思います。それでも、ここには積み重ねてきた《暮らし》があります。

共にこの先の暮らしをつくる仲間を求めています。お問い合わせのうえ、見学にお越しください。

宇宙を知る、小さき、小さきものたちよ

老健施設紅寿の里 施設長 仙道 富士郎

ウクライナ戦争は先が見えない。コロナウイルスは私が当初考えていたよりも数段手ごわいウイルスであるらしい。米国では子供たちが銃の乱射で撃ち殺されている。いま地球は荒ぶる状態としか言いようがない。

人間集団は、いつの時代から戦争の名のもとに行われる大量人間殺戮の理を謳ってきたのか、その詳細は定かではないが、古代にも戦争はあったわけで、戦争は人間という種の特性的の一つになってしまっている。

人間の生は多くの植物や動物の犠牲の上に成立しているわけで、殺戮行為は人間の業ともいえよう。このことからして、人間の倫理性の根本には不可避の矛盾が存在しているのだが、ここでは、その事実を一旦捨象したうえで話を進めるとして、人間が人間を殺すこと（殺人）は、古来、

非倫理的な行為として罰せられてきた。しかし、戦闘行為における互いの殺傷は、種々の条件は課されているものの、国際法の上では合法化されている。そうしなければ、戦争を引き起こそうとする試みそのものが成立しえないから、戦闘行為の合法化という国際法が生まれたのである。

しかし、一歩下がって考えてみれば、人間の命が、時と場合によって、絶対守られなければならぬものだったり、奪われても罰せられなかつたりするのは、論理矛盾である。だから、何度も、何度も、戦争の非倫理性が叫ばれ、反戦のうねりとなるのだが、人間は総体として戦争を止めることが出来ていない。実に情けない話である。他人事としてそう言うのではなく、人間種の一つ体としての自分に向けなければならぬ

言葉である。

ただ、以上触れてきた問題点の地平から論じてても、明るい光は一向に見えてこないようにも思う。ここは、レンズの拡大を無限にして、全く異なった世界からの視座が必要なのだ。そうして、私の心に浮かんだのは、宇宙である。「仙道はどうとう認知症になつてしまったか」と思わないでほしい。今回の拙文のタイトル、「宇宙を知る、小さき、小さきものたちよ」に行きつくのである。

宇宙には始まりがあり、それは138億年前のことであること、誕生以来宇宙は拡大し続けていることなどの宇宙の物語が、空想の世界ではなく、数学に基礎を置いた宇宙物理学によつて実証されつつあることを知った時、自分がこの地球で生きていることの意味をズシリと重く感じるようになったことを記憶している。さらに、宇宙はこの宇宙のほかにも存在しているというmultiverse（多元宇宙）の理論に立てば、人間のような知的機能を備えた存在が人間の他に宇宙には存在していない

という確率は極めて小さく、宇宙（人）はほかにもいるらしいという物語はなぜか心を明るくしてくれる。

一方で、宇宙論のもう一つの大事な論点は、宇宙の自己認識機構として人間が存在していることである。人間という種が宇宙に誕生し、その知能が現在の宇宙物理学樹立まで進化して来なければ、宇宙は自己認識を持つには至らなかつたわけで、人間は小さき、小さきものたちではあるが、宇宙の中で特異な位置に置かれていることも忘れてはならないだろう。

ボイジャー1号が、太陽よりも遠い位置から撮影した地球の映像は、0.12ピクセルの小さな点でしかなく、このプロジェクトにかかわったカール・セーガンは、それをpale blue dot（淡く青い点）と呼んだ。彼は、その著書の中で、我々が住むこの地球が淡い星屑でしかないことを実感するとき、うぬぼれや自己顕示欲が打ち砕かれ、もつと他に優しくすることを促されたと記している。そこには宇宙に中心軸を置いた視座が認

められる。私たちも一度空っぽになって宇宙に想いを馳せてみようではないか。
いま荒ぶる地球の中で生きるときに、セーガン博士の問いかけに耳を傾けてほしい（セーガン博士「ペイル・ブルードット」YouTube yaya）。



この後ボールがカーブしてガターに。すごく悔しがっていた。

ノラネコクロちゃん

彫刻家 中島 睦雄

大事に、大事にしていたネコのクロちゃんがあの世に旅立ってしまったことは以前ご報告した。淋しい限りであった。だが最近、全く見知らぬネコが家に現れるようになった。

両耳辺りと尻尾だけが黒く、全身は白い毛で覆われていた。この白いネコを「クロ」と呼んだ。私にとってネコは全てクロなのである。その白い毛は薄汚れていて、飼いいネコでないことは容易だった。つまりノラネコなのである。これが窓の所にやって来て、何となくもの欲しそうで

あった。

そこで私はネコ用の粒エサを買ってきて一掴みプラスチックの器に入れてやるのであった。するとこのネコはエサに興味がある様子だが、私が傍に寄ろうとすると近寄ってこない。私が離れるとエサに近づき食べるのである。やはりこれがノラネコなのであるう。

しかしそのうち、私が部屋の中にいる時、外から「ニャーン」と鳴いて、エサを要求するようになった。そんな関係になったのに、やはり私がエサから離れなければ食べに

来ない。私を、というより人間を警戒しているのだろう。近くの知り合いのKさんという方で、2匹のネコを大事にしている人がいる。このネコもやはり滅多に部屋に入っていないという。窓が少し開いていると、ほんの少し入って来ることはあっても、決して奥には入ってこないという。しかも、2匹のうちの一匹は絶対に部屋には入ってこない。

Kさんが言うには「人間に抱かれたことのないネコは人間に懐かない」「生まれて間もなく捨てられたネコは、人間の愛情を知らないのだ」。言われてみれば、そうかも知れない。我が家に毎日やって来るネコも、エサを要求して食べるけれども、与え続ける私に決して近づこうとしない。やはり私を、人間を警戒しているのである。

このようなネコを以前は「タネギネコ」と言っていた。考えてみれば可愛そうである。人の愛情を素直に受け取れないのだから。そんなに警戒しなくても良いのに。長い歴史の中、人間とネコ

は古くから一緒に暮らしてきた。人によってはまるで家族の一員のように大事にされ、具合が悪くなればすぐ病院へ連れて行き、お金をかけて治療してもらうのである。このように、人間は飼いいネコに対して愛情を持って関わってきた歴史がある。そして愛情を注いで貰ったネコは人にお返しをしてくれるということもあるのだという。

最近のニュースでは、親子の間柄でも悲惨でいたたまれない事件が報じられている。やはり重要なことは「愛情」であろう。「愛情」は何に増しても大切なのではないか。



隣の病院が移転し、不要になったパイプをいただいて新遊具に。



すみだ水族館

外出行事から

児童指導員 佐藤 義岳

5月のおわり、小5〜高1の子どもと一緒に、すみだ水族館に行きました。屋内施設なのでイルカショーなどはありませんが、クラゲの展示が充実しています。ペンギンが泳いだり歩いたりしている姿と、「3分くらいでなんとなく分かって、1時間くらい見ていられる！ペンギン相関図」を見比べながら過ごすのもたのしい。と、思いますよ、私は。地元だから年間パスポート買ったこともあるし。年に1回遊びに行くより、通勤通学の帰

りにふらつと通うのにはいいところというか。

うちの子たち、30分で出ました。クラゲ見入ってたじゃん。深海魚と見つめ合ってたじゃん。「かわいく」って言うってたじゃん。30分って。ミュージアムショップにいた時間の方が長かったよ！

回転寿司でお昼を済ませたら、東京ソラマチの中を歩き回ろう。そう思っていました。現実↓「早く帰りたい」「コンビニ行きたい（QUOカードの残額を確認したいから）」「東京を散策したい」。しかたない、帰ろう。



反省会。

メンバー構成が難しかった。幼児〜小学校低学年を連れて行くのに、電車で片道1時間は壁が高かった。部活がある中高生は連れて行けず、高学年とたまたま予定が空いていた子から希望者を募ったものだから、施設内でもあまり見たことのない集まりに。水族館を出た後、「何時まで自由行動、駅改札集合、解散！」とできるほど大きい子ばかりではなく、ずっと一つ

の塊でまわれるほどまとまりのある集団でもなく。

「スカイツリーの展望台は中学校の遠足で行ったからいいよね」とコースから外したけれど、高1の子はコロナ禍で遠足が中止になっていて、スカイツリーは今回が初めてだった。登っても10分くらいで一周したら「もう帰る」と言いそうな子たちだけど、行けばよかつたかな。ああ、行事の計画って難しい……。

心理室から

公認心理師 岩井 結菜

先日、食堂で高校2年生のみずきと話をしていると、就職か進学か、将来について悩んでいると、いま通っている高校のパンフレットを見せてくれました。

卒業生の就職先や進学先と一緒に見ていくうちに、みずきから「世の中には自分の知っている仕事の他にどんな仕事があるのだろう」という疑問が出てきました。

私は食堂にあった職業一覧の本をみずきに渡して、目次から気になる職業や興味のある分野を一緒に探しました。



慣れた手つきでヤギにキューブをあげる。

内容は読み進めていく中で、みずきは「○○になるためには進学しないといけないんだね！」（気になった職業を）帰ったら調べてみようかな「学校にある求人票を何個かもらってこようかな」などと言っていました。

それは、あと1年で自立をしなければならぬ不安を抱えながらも自分自身と向き合い、将来への選択肢を増やしながら、一歩踏み出してみようとするみずきの姿でした。おおむね18歳まで、という限られた時間の中で、子どもたちは光の子どもの家を卒業して社会に出ていかなければなりません。

みずきとの会話を通して、子どもたちから語られる様々な不安や悩みを大人も共に抱えながら一緒に考えていく、

この時間を積み重ねていくことが子どもたちにとって大切な経験になるのではないのかと感じました。カウンセリングという場所に限らず、生活の中でも工夫しながら子どもたちと話をすることの出来る場所を作っていただけらなと思えました。

原田家から

保育士 岩瀬 志穂

日々暑さを感じる今日この頃ですが、皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

今年の夏休みが近づいてきました。コロナ禍以前は、子どもたちと共に山登りや海や行楽地などと、泊まりで計画をたてて出掛けていましたが、ここ数年の夏休みはあまりそうだったこともできず、

その中でも色々皆で工夫して過ごしてきました。今年も色々な企画をしているようですが、どうなることやらず。

でも、子どもたちも、もちろん職員たちも、夏休みを良いものに！楽しいものに！良い思い出に！という想いは一緒だと思います。

今年はどうな夏休みを過ごせるか少し不安でもありますが、楽しみたいと思います。

仙道家から

主任保育士 岩崎 まり子

毎日暑い日が続いています。皆様、お元気ですか。

コロナや部活の制限がなく、自由な外出を謳歌し始めた高校3年生の蒼士。しばらくは「青春だねえ」などと



佐藤家前のガーデニング

楽しみと同時に責任を持つことの大切さをわかって欲しいと伝えました。

彼には、こちらの心配する気持ちには理解できないようにでしたし、「責任」という言葉には「施設だから」というマインナスしか受けとっていないだろうと感じられ、ここで共に生活するというこの意味について、私は改めて考えさせられています。

一方的に「施設の規則だから」ということではなく、一人ひとりの状況や気持ちを伝え合いながら折り合って、思いやりながら生活をつくっていきたくと願っています。どの子どもにとってもかけがえない育ちの季節です。

コロナ騒動から

副施設長 小西 剛史

彼の言い分も気持ちもよくわかります。私たちは、そのことも、また、君が何か悪いことをすると考えているわけではないという信頼も伝えました。それでも無事に帰ってくるまで心配だし、帰宅を確認する責任もあること、そして、何よりも自分の生活に

まるで時候の挨拶のように何かにつけてコロナウイルスに関する話題ばかり、今回も結局そんな書き始めになっしまいました。『これももう最後にしたい！』と願う今日この頃であります。振り返れば2年と少し前に始まったこ

の騒動は子どもたちの当たり前の生活を脅かす物でもありません。

この騒ぎが始まって間もない2020年4月、わたしは地元の高校へと進学した男子の入学式に参加しました。小学生の頃はミニバス、中学時代からはバスケットボール部で活躍していた彼は、高校生活においても当然同じ部活動で青春を謳歌する予定でした……が、部活動自体の縮小、大会の延期、中止などが相次いだ高校生活は不完全燃焼のまま最終年度を迎え、結局部活動で活躍する姿を一度も観ることなくこの6月には引退を迎えました。

そして時を同じくして中学校へ入学した男子も同様に、中学校生活をコロナ禍と共に過ごし、幾度となく延期されたあげくに中止となったスキ―教室やその他活動の短縮や中止を余儀なくされました。せめてもの救いは、入学後2年間一度も見学することが出来なかつた部活動の試合が、先日行われた最後の大会だけは『保護者1名のみ』という制限付きで観戦出来たことで

す。ただ、その試合で惜しくも敗退し引退となってしまったため『入学後初めて観た試合が最後の試合』ということになってしまいました。

人生で一度しかない青春時代のうちの2年間、不完全燃焼で過ごす事を余儀なくされたのは当然彼らだけではありません。でも悲観的なわたしは前を向いて歩み始めております。

前者の高3生は既に18歳成人！となり、就職活動に取り組みつつも部活動引退後の学校生活を謳歌し（過ぎ）ており、毎日のように夜遅くまで家に帰ってきません（笑）。後者の中3生は高校進学に向けて勉強に取り組みつつ、関西方面への修学旅行へ今まさに出かけている最中です！

そして今年の夏休み、3年ぶりに遠出や宿泊旅行など子どもたちが楽しみにしていた夏行事が実現しそうです。これまでどのような時代の荒波があろうとも、変わることもなくお支えくださった皆さま方に感謝申し上げますと共に、わたくしたちも子どもたちに

負けないよう、新しい時代、明るい未来に向けて取り組んでいきたいと思えます。

**団体等でお読みいただきたい
ているみなさまへ**

これまで教会や学校などの団体には、おひとりおひとりの手に取っていただけるよう、複数部お送りしてきました。次号（No.207）からは、団体につき1部のみお送りすることを基本とします。

機関誌「光の子」は、ひとりでも多くの方に「子どもたちの暮らし」に「私たちがはたらき」「応援していただいていることへの感謝」をお伝えすることをめざし、光の子どもの家の創立当初より発行を重ねてきました。

現在、「光の子」は、光の子どもたちのホームページ上にも掲載しています。そのためここ数年、「いつもネットを読んでいきます」というお声をいただくことも多くなりました。

施設の経営上、郵送費の値上げや、環境資源保護も考え



おもちゃの銃で遊ぶ子がいて、小さい子たちの間ではBB弾を拾うのがはやった。

なければなりません。それらの事情から、送付部数を変更することにいたしました。もちろん、皆様にお読みいただきたい気持ちは変わりません。引き続き複数部の送付をご希望の場合は、メールまたはお電話にて、ご遠慮なくご連絡ください。今後とも変わらぬご愛顧をよろしくお願いたします。

あわせて、団体、または個人単位での新規送付希望もお待ちしております。

近藤みちるさんの
共育でカンガル―日記は
休載です。

施設に子ども会議は必要か

児童指導員 佐藤 義岳

7月の「関東ブロック児童養護施設研究協議会」に派遣された。

私は分科会「権利擁護」当事者の視点を尊重した施設づくり」に参加した。2つの施設の実践報告を聞き、《子どもの意見をどのよう傾聴するか》《子どもの意見を施設運営にどのよう取り入れるか》《権利侵害から子どもをどのように守るか》を論点に、グループで話し合った。

報告①は、「手紙箱（意見箱）」「子ども会議」「日々の暮らしを通して子どもの声を聞く」という、児童養護施設としては《オーソドックス》な取り組みだった。

報告②の実践は、施設長が子どもたちへのお年玉として引換券を配る。子どもは「A、施設長が2時間個別にかかわる」「B、施設長が1発芸を披露する」「C、お菓

かを選んで交換することができる。中高生はAを選ぶ子が多かった。個別のかかわりの中で子どもがやりたいと言っていたことを実現していた。という内容だった。

報告を聞いた参加者同士の話し合いで、私は「子ども会議」について問題提起した。

報告①の中で、「子ども会議」のエピソードとして、「職員はここを（家）だと言

うが、友だちの家に男性用小便器はない」という子どもの発言が紹介されていた。

しかし、「子ども会議」も一般的な家にはないだろう。《この30数年間、光の子どもの家は「大人の職場」としてではなく、ひとりひとりが異なる子どもと大人が共に生きる「家」、暮らしを出来るだけ楽しく、一緒に作っていきまいた。》（当施設ウェブサイト「職員募集」より）

子どもと職員を、共に暮らしを作る仲間と考えるなら、子どもだけを集める「子ども会議」より、ユニットごとに子どもも職員も話し合う「家会議」の方がよいのではないだろうか。

他施設の参加者からも、「それは家庭的養育を指してきた時代の流れを表した考え方」「うちの施設も子ども会議はやっていない」などと同意する意見があった。

また報告①において、子ども主体に「子ども会議」を運営することの難しさが課題だと言われていた。

たしかに、「会議」だと緊張して何も言えなくなる子がいったり、年長児や声の大きい子の意見ばかり通ってしまったり……、となることは想像がつく。

「子ども会議」と「家会議」。どちらにしても、参加しやすい子／しにくい子がいる。取り組むかどうかは、施設の性質や考え方にもよる。いずれにせよ基礎となるのは、日常生活で聞かれる子どもの声やつぶやきを聞き取り、フィードバックすること

だろう。場合によっては、その声は一人の子どもの考えなのか、他の子はどう思っているのかと、聞いて確かめてみることも必要になる。

子どもと職員も人間同士、相性が合う／合わないはどうしてもある。関係が近い職員にはかえって話せない、という場合も。そんなとき、ユニット外の職員や事務、心理士も含めたチームで子どもに対応できるのは、施設の強みと言える。まずは誰か一人でもつながれば良い。

子どもによって、入所にいたる経緯も、健康状態も、性格も違う。入所時の年齢から現在まで重ねた関係の厚さもバラバラだ。職員としてはそれぞれの個に合わせて対応するのだが、子どもからは不公平と見られることも多い。最近では、外出の可否、帰宅時間、スマホのルール……。

対応が違う理由も説明できる場合とできない場合がある。できる範囲で誠意を尽くし、都度対話するよりない。以上、施設内で収まることについて書いた。施設外に関わることは、別稿にて。

「卒園生職員」

児童指導員 奥寺 美鈴

私が「光の子どもの家」で働き出して数年が経った。今では担当補助をやり、こうして文章まで書いているのは、とても変な感じがする。

私はいわゆる「卒園生職員」だ。それ故、他の職員とは少し違ってしているかもしれない。

二才になる前に入所し、「大迷惑」をかけた子どもだ。中三の時に家出をしてそのまま帰らなかった。社会の中でお金を稼いでいた時期はそれはもう好きに遊び依存症にもなった。二十代後半で底をつき生活保護になり入院もした。

リハビリという形で施設内の清掃をしないかと施設長の竹花に声をかけてもらったのがきっかけとなった。私自身、「荒れた子ども」だったが、幼少期はとても愛され、人間性の基盤はここで作ってもらった。荒んだ社会に身を

置いても生き残れたのは、当時の担当、今もこの職員である施設長、最後に担当し多方面に頭を下げに回ってくれた岩崎のおかげでもあり、当時の理事長、菅原先生の「お前の人生の立て直しのチャンスを一度だけお前にやる」という言葉のおかげでもある。

そんなこんながあり働き続けて二年程は毎日のように子どもから暴言を吐かれながらの生活だった。「くそばばあ」「消えうせろ」「死ぬ」等。「ゴキブリ」と言われた時には流石に笑った。幼稚園の年長でよくそんな単語が出てくるものだと。

岩崎の補助として入っていたため、子ども以上に岩崎の休みが嫌でたまらなかった。それでもやれていたのは子どもたちとのやり取りが楽しかった事と子どもたちと生活している事で「生きていく」と

実感していたからだと思う。子どもの面倒を見ている事で規則正しい生活を送り心身共に健康でいられたのだった。

今では私がまともに生きていくためにここで働いていたと言うようになっていく。そのために私に出来る事、卒園生の私だから分かる、感じる事、子ども側の気持ちも分かる事を子どもにとって良い方向に行くために使えたら：と思う。

「光の子どもの家」はアフターケアにも力を入れていて卒園した子ども達も誰かしら職員と繋がっている。幼少期でなくても分かる事だが、児童養護施設から一人立ちした者はその後も苦労があったりする。

入所している間にはやりとりの無かった親からの連絡、親に居場所を知られない様に隠れるように生きている者もいる。親からの優しい言葉が嬉しくて親から言われるままにお金を渡してしまふ者：。かつての私もそうだった。断つてからは連絡が来なくなつたが。

そうでなくても幼少期に感じた孤独感を解消できないまま成長していけばその後何かに依存しやすくなるのは当たり前である。だからこそアフターケアでいつでも連絡をとれる存在というのはとても大切だと思う。

私がこうしてここで働いているのも、アフターケア？と思ってしまう時もある。そうだったとしてもそうでなくても私は、私のためと私の生活を支えてくれていた子どもたちのために出来る事をしていくだけなのだ。

私にありとあらゆる暴言を吐いていた子どもは今は小三になり私が宿直で入る日をとっても楽しみだと言ひ、喜んでくれている。他の子どもも親しみを込めて私が少しからかうと「おばさん」と言い返して来たりする。私は「職員」と「措置児童」というような感じではないそうだったやとりをととても嬉しく思う。

こんなに笑いながら生活しているのは私が入所し小学校の低学年まで位だった。今、私が担当しているのは男児ばかりの家だが、高校生や中学

生の男児が大声で笑う姿を見ると昔とは違うなあ、これが職員が長い時間をかけて作ってきたものなのだなあと思っただけ羨ましくなる。そして今は職員の立場としてその中に居られる事を幸せに感じる。

日誌抄

2022年4月～6月

【6月1日の在籍児童数】

- 幼児 4名 小学生11名
- 中学生6名 高校生11名
- その他1名 計 33名
- ※一時保護を含む

【4月】

- 4日 進級・進学祝いの会
- 15日 ⑦萌愛の国民健康保険加入手続のため、児相発行の書類を持って居住地の役所へ
- ※⑦アフターケア
- 16日 翔平、塾に通い始める
- 18日 1～4月生まれの誕生会&新任職員歓迎会
- 22日 夕礼拝、木田浩靖牧師ご奉仕
- 25日 本園で子ども1名コロナ陽性、接触があった子ども・職員の隔離と検査

【5月】

- 3日 仙道家の児童3名と小西、車中泊
- 5日 子どもの日、園庭で会食パーティー
- 8日 性教育コーディネーターの足立泰代氏による男児向けオンライン性教育
- ⑦瑠璃から卒園時に担当していた倉澤へカーネーションが贈られてきた
- 9日 職員1名コロナ陽性、濃厚接触者なし
- 3月に入所した福、幼稚園に通い始める
- 10日 幼児のひろみが入所
- 13日 ⑦香織の大学院修了コンサートへ
- 16日 5月生まれの誕生会
- 18日 後援会総会
- 20日 パントリー
- 夕礼拝、佐々木豊牧師ご奉仕
- 24日 後援会とコロナ禍の支援について協議
- 大利根陶芸クラブ来訪、寄付を賜る
- 27日 夕礼拝 橋本神学生ご奉仕
- 28日 招待を受け子ども6名をすみだ水族館へ

【6月】

- 6日 ひろみ、幼稚園に通い始める
- 17日 夕礼拝、佐々木豊牧師ご奉仕
- 19日 ⑦職員宿舎から専門学校に通っている親太、一人暮らしに向けてアパートの内見へ
- 20日 6月生まれの誕生会
- 24日 夕礼拝、木田浩靖牧師ご奉仕
- 25日 2018年のカリフォルニア実習生ステッフさん来訪

【委員会の主な動き】

- 運営 職員体制検討 雨漏り
- 改修計画 物品寄贈取扱協議
- 危機管理 コロナ対応 避難訓練 消防設備点検立合
- 学習支援 学習会実施
- 環境整備 園定害虫駆除消毒
- 除草作業
- 食生活 子どものアレルギー情報共有
- 研修 今年度施設内研修を検討
- 討 新任職員研修実施 子どもへの性教育とCAPについて
- 外部講師と打合と実施
- 広報 「光の子」発行
- 情報・通信 子どものスマホ

購入手続を順次進める
行事 各月の誕生会担当者決定 各行事実施委員会の招集

【寄贈者各位】（敬称略）

- 秋山清二 稲塚由美子 今田健二 大塚東一 小田切未由美 小野田光雄 金久保公男 金子智幸 五條レイナ 小城きい 清水亨桐 杉山和俊 仙道富士郎 高久容子 高塚充子 鳥海良子 丹羽吉康 根岸亜麗朱 蓮田健 長谷川彰雄 長谷川一男 古川景子 山口榮子 山口まゆみ 湯澤真彦 暁星小学校シャミナード会 CTIFロントイア しずくの会 須賀川教会
- すくすく広場 セカンドハーベストジャパン ダスカ&デジレール 高橋会計事務所 (株)チュチュアンナ1%クラブ (株)なとり 東大宮教会 (有)ベレ出版 マルハン古河店

【ボランティア各位】（敬称略）

- 〈華道〉岡本有代
- 〈手芸〉山田 智 山田裕子
- 〈学習〉常松洋介 向井 進
- 他多数の皆様

子どもたちのかがやきとともに

— 光の子どもの家をお支えください —

光の子どもの家は創立37年となりました。創立当初、様々な事情で家族と離れて暮らさなければならぬ子どもたちの、親に代わるような関係づくりを目指しました。当時の子どもたちの輝く笑顔と、一方でその重さに押しつぶされそうだった日々も、今では懐かしい思い出になりそうなほどに年月を重ねてまいりました。

ここ数年、入所にいたる子どもの状況は大変さを増す一方です。すべてではありませんが、虐待による心身の傷を抱えていたり、あるいは発達障害など、学校や社会で生活するうえでの難しさを感じるケースが多くなりました。幼いころから寝食を共にしてきた子どもであっても、成長した後に深い傷に向き合って、ひとりでは抱えられない重い不安を表現している状況があります。

この家の主人公は子どもたちであるという初心に常に立ち返り、光の子どもの家での出会いに感謝して暮らしを大切にしながら、子どもが卒園した後の長い人生まで連続性のある養育ができるよう、光の子どもの家の総力をあげて取り組んでまいります。

いつも多くの皆さまが励ましてくださったことを心から感謝しています。今後の建物修理・改修と、子どものアフターケアの充実のため、皆さまのご支援を賜りたく、あらためてここにお願い申し上げます。

社会福祉法人 光の子どもの家 理事長 大高晋一郎
光の子どもの家を支える会 代表 永野 三恵

郵便振替 00130-1-128022

他銀行からのお振込み

【銀行名】 ゆうちょ銀行 【金融機関コード】 9900 【店名】 019店
【店番】 019 【預金種目】 当座 【口座番号】 0128022

【発行】 社会福祉法人 光の子どもの家 【住所】 〒349-1155 埼玉県加須市砂原277
【電話】 0480-72-3883 【FAX】 0480-72-6649 【メール】 hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp
【Webサイト】 <http://www.hikarinokodomonoie.com/> 【振替】 ゆうちょ銀行 00130-1-128022
【印刷】 (株)エル・アートデザイン